

1部 第2回いのちを考える市民講座

平穏死のすすめ

石飛 幸三先生をお迎えして

2部 いのちを考えるシンポジウム

迫井 正深(厚生労働省老健局老人保健課長)

行田 泰明(淳友会わたクリニック診療部長)

秋葉 博子(慈恵医大葛飾医療センター 入退院・医療連携センター 退院調整看護師)

平成27年9月13日 於 テクノプラザかつしか 大ホール

第2回いのちを考える市民講座『平穩死のすすめ』を無事終えて

訪問看護ステーションは一との年に一度の最大イベントが平成27年9月13日に行われた。昨年の慌ただしさを反省し、今年は早くから準備に臨んだはずだったが、今回も幾つかの課題が残った。宣伝期間が短く集客を心配したが、テーマが市民の声から頂いたものであったためか、280名の方が集い、時を共にすることができた。

この会の売りは市民のためのものであり、私たち医療者や専門職そして行政は正しい情報の提供者。たくさん人の情報化社会で「何が自分にとって有益な情報か」に戸惑う市民が、課題を他人まかせにするのではなく自分の事として捉えられるよう環境を整えることは、予防医学や治療をも越える大切なケアであると私たちは考える。できれば、今後参加者のすべての声を聴く場を設けたいところである。

前半は石飛幸三氏の「平穩死のすすめ」のご講演を聴き、考える材料を得た。先生のお人柄がうかがえる豊かな語り口は、私たちのところにやすらぎとピンポイントにその時のあり方を諭してくれた。スクリーンに映し出された映像も想像を誘ってくれるものであり、人生医学の極論と思えた。

後半のシンポジウムは厚労省の迫井さんが日本の抱える問題と方向づけをお示し下さり、関心をさらに高めて下さった。引き続き、わたクリニクの在宅医である行田先生がリビングウイユまで導いて下さり、行動力の大切さを語られた。看護の立場からは慈恵医大葛飾医療センターの秋葉さんが事例をよせながら、時代の流れとともに患者さんも生活モデルへ変化してきていると話された。来場された方々との意見交換の場でも、第一線でご活躍されている先生方の工夫やアドバイスは適切で具体的なものばかりであった。

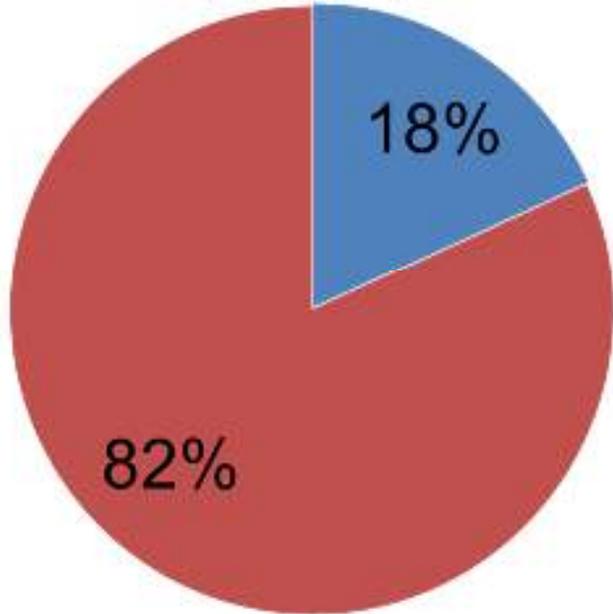
さらにアンケートからは、テーマの関心の深さと感謝の声が多かった。さらに第二部への意見や要望も多く、「葛飾区の行政や保健所の方とコラボしてほしい」「小さくても良いので定期的開催してほしい」との声が寄せられ、次回への課題が見えた。

人生の最終章が訪れたとき、私たちが一番自分らしい選択ができるようにするには、「どのような準備や心構えが必要か」を皆が考える機会を提供ができ、みのりある1日になった。日常業務に追われているが、地域ケアの大切さをあらためて考える良い機会を得た。ご協力下さった笹川記念保健協力財団はじめ地域の有志たちスタッフに改めて感謝申し上げたい。

木戸 恵子

アンケートの集計結果①

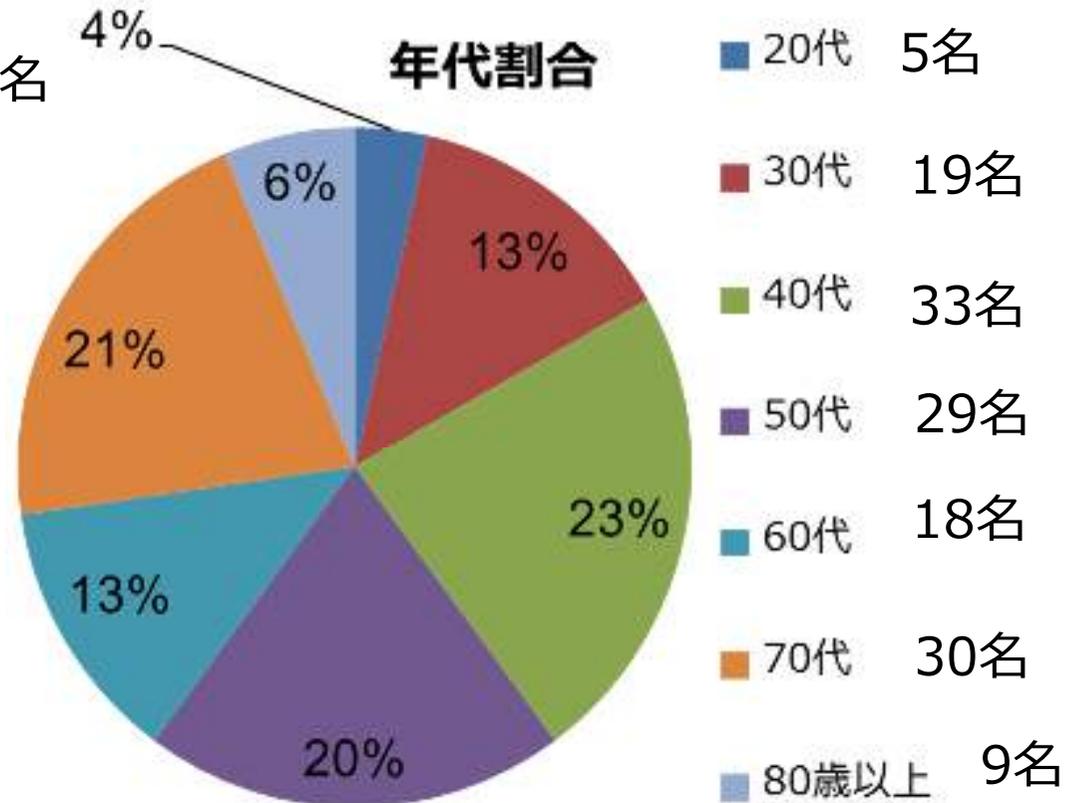
男女比率



■ 男 26名
■ 女 117名

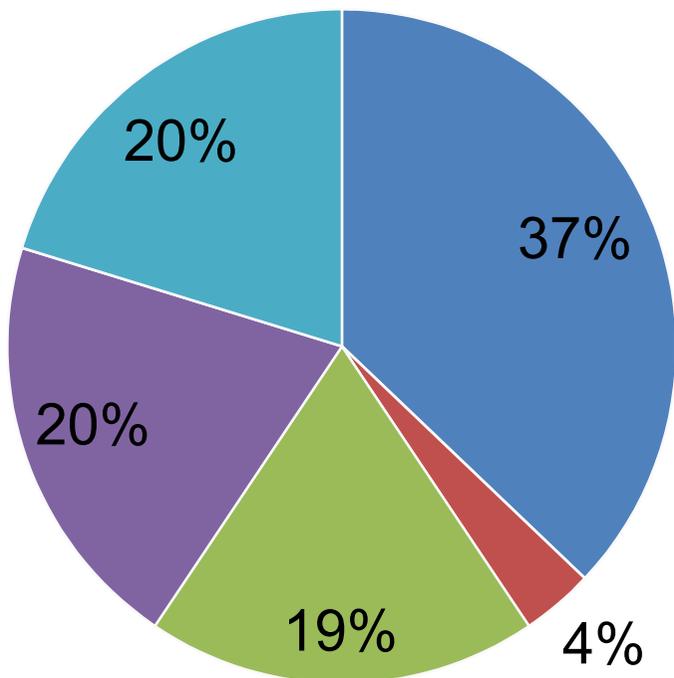
ご回答総数
143名

年代割合



アンケートの集計結果②

市民講座を知ったきっかけ



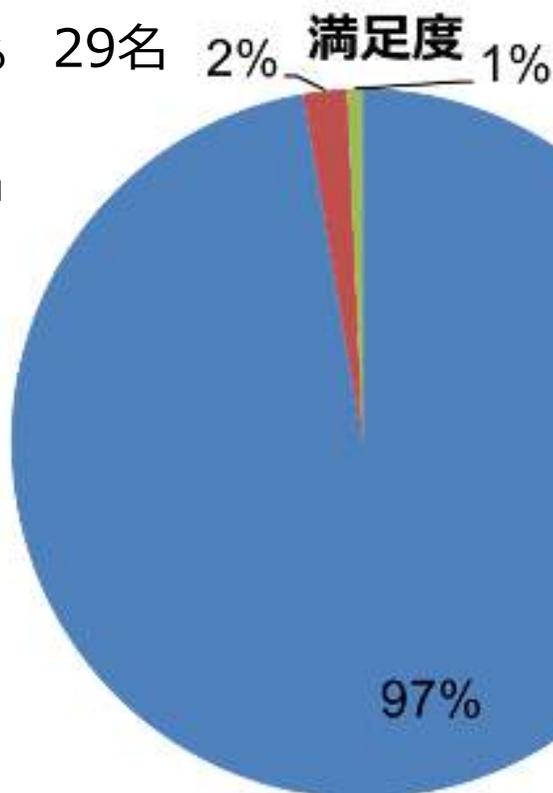
■ チラシ・ポスター 53名

■ ホームページ 5名

■ 広報 27名

■ 友人・知人から 29名

■ その他 29名



■ 満足 138名

■ まあまあ 4名

■ できなかった 1名

参加者の御意見・ご感想

親しい身内の無い高齢者が多くなっているように思います。
入院や施設の入所も困難になる場合もあり、
行政として何か支援が無いのかと思います。（40歳代）

介護の漂流民・生活困難高齢者の急増の話（60歳代）

老後、お一人様で生きていく為にはどんな準備が必要なのか。（40歳代）

年齢を重ねるとやはり自分はどんな状態になるのか？その時の私の周りには
どんなことになるのか心配です（70歳代）

市民の生の声を聴いて見えてきた課題

今回の市民講座で各世代からアンケートを頂いた結果、どの世代からも隔てなく、

- ・ 近親者がいない場合の在宅での過ごし方、
- ・ ひとりで最期を迎えるのが心配だ

etc…

というようなご感想を多く頂いた。

そこで「第3回いのちを考える市民講座」は
「おひとり様」をテーマに取り上げて開催を予定。

また、葛飾区の厚生部、保健所関係の職員が出席していないのが残念です。というご意見も頂き、次回は是非協力体制を広め、より意義のある活動を行っていきたい。

「看ます。生きます。この街で。プロジェクト」はこれからも市民の声に寄り添った活動を展開していく。









